

『東遊略抄』について

—趙鏞殷(趙素昂)の日本留学日記—

武井 一(東京都立日比谷高等学校 教員)

はじめに

『東遊略抄』は、趙鏞殷(=趙素昂)が1904年 大韓帝国皇帝が日本に派遣した「皇室特派留学生」として東京に留学してから、1912年帰国直前までの留学日記である。この時期、趙鏞殷をはじめとして、多くの留学生が日記を記したとみられるが、現在まで残っているものは皆無に近い¹。『東遊略抄』は、この時代の日本留学日記として唯一無二のものといえるが、これを通じて、趙鏞殷の体験や思想的变化はおろか、当時の留学生を取り巻く状況まで克明に知ることが出来る。

これまでも『東遊略抄(以下『日記』)』は注目されてきた。金洪周は『韓末 在日 의 留学生民族運動』で、『日記』から、同盟休校などの日本における留学生の民族運動を明らかにしようとした²。また、金基承は、『조소앙이 꿈꾼 세계(以下『夢見た世界』)』で³、趙鏞殷の日本留学時代が、その後の民族運動思想につながる思想的影響を与えた源泉であることを『日記』の記述から実証的に論じている。さらに、同氏は「日本留学を通じて見た趙素昂の近代体験」において、趙鏞殷の日本留学は、それまでの時間の感覚から、「近代的な時間に統制されて行くことに慣れていく過程であり、同時に日本近代文明国家のモデルと侵略国家という肯定と否定の二重的イメージを持っている国として体験されて行く過程」であるとした⁴。その分析は『日記』を詳細に用いている。だが、これらはいずれも『日記』自体を対象としたものではない。また、日本の当時の制度や社会的背景と趙鏞殷の体験との関係についても必ずしも明確でないところがあった。

武井一も『日記』を利用して『皇室特派留学生』を著したが⁵、これも趙鏞殷を含む皇室特派留学生全体が対象であったため、『日記』そのものを扱ったわけではなかった。このように『日記』全体を扱ったものは今まで存在しなかった。

筆者は2008年2月、「植民地朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究」を主催した波田野節子(はたの・せつこ)新潟県立女子短期大学(現新潟県立大学)教授の勧めによって、『日記』の日本語翻訳を試みることにした。あわせて、当時の日本、韓国の新聞記事、日本の内務省や外務省の記録も参照して、日記本文だけでは分からなかった具体的な事実や、趙鏞殷が日本で経験した様々なことを明らかにした。

また、趙鏞殷が日本留学時代に著した文章も翻訳した。その多くは『大韓留学生会報』、『大韓興学报』に掲載されたものであるが、韓国の『大韓毎日申報』、『万歳報』などに掲載されたものもある。なかには、最初の留学先である東京府立第一中学校(現：東京都立日比谷(ひびや)高等学校。以下一中)の「学友会雑誌」に日本語

¹ 李光洙は日本で書いていた日記を釜山で失ったという(波田野節子『李光洙『無情』の研究』白帝社(2008)102頁註8)。このように失われたものも多いのであろう。これとは別に、崔南善「入校宣誓拾周年」、崔麟「自叙伝」など、留学時代を回想したものはいくつか残されている。

² 金洪周『韓末 在日 의 留学生民族運動』너티나무(1993)

³ 金基承『조소앙이 꿈꾼 세계(以下『夢見た世界』)』지영사(2003)

⁴ 金基承「日本留学を通じて見た趙素昂の近代体験(以下「近代体験」)」(訪日学術研究者論文集 - 歴史-第10巻(日韓文化交流基金 2007)31頁以下)

⁵ 武井 一『皇室特派留学生』白帝社(2005)

で書いたものもあった⁶。

さらに、『日記』の内容を元にして、「趙鏞殷が日本で連絡を取った人と連絡を取った日」、「趙鏞殷が出会った人の経歴」、「趙鏞殷の読んだ本」、「趙鏞殷の日本生活年表」を整理し、関係資料として「年譜」、「留学生規程の変遷」、崔鍾庫「趙素昂の法思想」などを掲載した。また、実際に趙鏞殷の足跡を訪ねた「趙鏞殷の下宿の変化」、「趙鏞殷の実家」を紹介した。

だが、翻訳は完全には終わっていない。まず時間が少なかった。翻訳に取りかかった時が、3年間にわたる事業の最終年度であったため、わずか1年しか時間が残されていなかったからである。翻訳は日本式漢文訓読法で読んだため、韓国での読み下し方と違う可能性もある⁷。訳すことが困難で、仮訳や漢文のまま残してあるところもある。困難な理由は、訳者の力量不足も多分にあるが、テキストの問題も大きかった。

これまで『日記』のテキストには、三均学会編『素昂先生文集 下(1979, 以下『全集』)⁸が用いられてきた。今回も『全集』を利用せざるを得なかったが、他の史料と比較すると、『全集』版に多くの問題があることがわかった。日記の日付と実際が一致しない日もあった。だが、なによりも漢字の間違いが多かった。その多くは、趙鏞殷が日記を整理したときか、原典から活字に移記するときに生じたと思われる。そこで本論ではまず、テキストの問題を指摘することとしたい。

続いて、趙鏞殷の学んだ学校の様子を整理したい。何よりも、趙鏞殷は日本に留学したのであって、学校での経験が後の趙鏞殷に大きな影響を与えたと思われるからである。

趙鏞殷が日本に来た当時は日本では実学教育が大変重視されていた。一中で受けた教育は、実学教育を受けるための基礎教育であったが、留学生の希望していたことはちがっていた。そのことを基礎に一中時代を整理したい。また、明治大学で受けた教育にも触れたい。趙鏞殷は明治大学法学部正科に在学したが、この時代の法律学はドイツ法律学の絶大なる影響下にあった。だが、金基承も指摘するように、法律学にあまり関心を持っていなかった⁹。何らかの影響はあったと思われるが、趙鏞殷の関心からすれば、当時の日本思想界からの影響の方が大きかったようだ。そこで、学校の経験に続いて、趙鏞殷の宇宙観と当時流行した大正生命主義について触れたい。

もとよりここで扱おうとするものは、すでに金基承が深く取り組み成果を発表しているところであって、それに答えるためには、いずれもより深く研究しなければならない。そこで本論では、各論点について『日記』から読み取れることを中心に、問題点を指摘することに留めたいと思う。なお、歴史用語は日本側の用語を用いることとする。

東遊略抄とその意義

『東遊略抄』は、趙鏞殷が1904年10月、日本留学のため仁川港を出発してから、

⁶ 「学友会雑誌」48号(東京府立第一中学校学友会(1906))131頁以下

⁷ 日本では、韓国での読み方と異なり、極度に定型化された日本式訓読法があり、漢文は中国文ではなく、それ自体で日本語古文として読まれる。たとえば、趙鏞殷もよく使っていた「嗚呼」、「噫」、「嗟」はすべて「ああ」と読む。

⁸ 三均学会編『素昂先生文集(下)』(1979)

⁹ 金基承前掲『夢見た世界』43頁

1912年5月、留学生寄宿舎に移るまで書かれた日記である。趙鏞殷はこの年の7月頃帰国しているから、留学期間のはぼ全期間にわたって書かれたと言ってよい。趙鏞殷の留学期間は、日本の年号では明治(めいじ)37年から明治45年である。趙鏞殷が帰国した月の7月31日には明治天皇が逝去し、大正(たいしょう)天皇が即位する。したがって、趙鏞殷は明治時代の終わりとともに韓国に帰国したことになる。

『日記』の原典は全5冊からなる。

それぞれ

- 第1巻 1904年10月9日から1907年1月25日(留学出発から一中卒業直前)
- 第2巻 1907年1月26日から不詳(補習科入学～不詳)
- 第3巻 不詳から1909年11月23日(不詳～明治大学法科正科入学)
- 第4巻 1910年1月1日から1911年3月20日(明治大学在学)
- 第5巻 1911年5月7日から1912年5月31日(明治大学在学)

『日記』は主に漢文で書かれているが、国漢混交文、純ハングル文、日本語、英語も使われている。このうち国漢混交文、純ハングル文は感情的に昂ぶっていて、漢文で表すことができなかつたときや¹⁰、詩に現れる¹¹。それに対して、日本語、英語は試験問題などごくまれである。

『日記』は日本で経験したことを、後世に振り返るために記録しようとしたもので¹²、何かの主題や、意図を持って書かれたものではない。その内容は多岐にわたっていて、全体として統一された印象はない。

「学校へ行く」、「学校へ行かなかつた」としか書かれていない日も多いが、第2次日韓協約、ハーグ事件、第3次日韓協約、韓国併合の時には、かなり細かく活動状況を記載している。また、趙鏞殷が関心を持ったことの多くは事実だけでなく、感想なども記している¹³。それゆえ、趙鏞殷が「何を」、「どのように」取り上げようとしたかを検討することによって、趙鏞殷の関心事、心理状況の変化を知ることが出来る¹⁴。

日記は後から整理した部分もあるようだ。日付の前後関係がおかしい部分もあるし¹⁵、他の記録と日付が合わないこともある。たとえば、1905年の一中の房総半島旅行について、1905年8月8日から8月10日までの日記の記事と、一中側の記録はそれぞれ1日ずれる¹⁶。これは明らかに後に日記を整理したときに誤つた部分であろう。

日付が飛ぶことも多い。特に、1909年は書かれていない日の方が多く、数ヶ月とぶこともある¹⁷。この年は、趙鏞殷が『大韓興学报』の編集長として活動していて、

¹⁰ 純ハングル文については1906年8月19日、国漢混交文は1906年10月25日など。

¹¹ 1911年12月20日

¹² 『東遊略抄』序文

¹³ たとえば、1906年9月18日は家から来た手紙に喜び、感想と、漢詩を二首書く。

¹⁴ 趙鏞殷は留学したてのころに地震について記載している(1906年1月21日、2月23日、2月24日、5月10日)が、その後は記事に出てこない。慣れてしまったのであろう。金基承『夢見た世界』73頁以下では、読書による関心の持ち方を『日記』の記事を元に詳細に分析している。

¹⁵ たとえば1910年7月29日は、前段と後段で時間の前後関係が合わない。後から挿入したのかもしれない。また、1906年2月10日の記事の末文に、夜に月食があつたと書かれているが、新聞記事などから実際は2月9日であつた。

¹⁶ 前掲「学友会雑誌(以下学友会)」46号

¹⁷ 1909年5月4日から7月18日、11月23日から12月31日が書かれていない。

ほぼ毎号にわたり多くの論文を発表していた時期にあたる¹⁸。そのため日記を書く余裕がなかったとも考えられる。1909年の伊藤博文暗殺、李完用殺人未遂についてもまったく触れていない¹⁹。1909年11月23日以降書かれていないためであるが、忙しさのあまり「たまたま」書かなかったのか、捜査を恐れて削除したのかは不詳である²⁰。

『日記』からは、趙鏞殷が『日記』を日本側に没収されることを恐れていたことがわかる。1910年には「不穏なことがあった」²¹、「天下こぞって顧みず(天下挙不顧)」という隠語めいた表現が多く見られ²²、1910年8月の韓国併合前後をはじめとして、伏せ字も所々見られる²³。『日記』自体、併合後しばらくの間、捜査官に見つかることを恐れて、隣室の洋服箱の中に隠されていた²⁴。

これほど没収を恐れていたのに、不思議なことに、1912年に趙鏞殷の自宅が実際に捜索をされたとき、何故か『日記』は没収されなかった²⁵。理由は分からないが、『日記』が今日まで残ったことは、奇跡に近いことであった。

趙鏞殷は皇室特派留学生として日本に来て、東京府立第一中学校に入学し、留学生監督部補習科、正則(せいそく)学校(正則英語学校、現：正則学園高等学校)、明治(めいじ)大学予備校、明治大学予科を経て、明治大学正科法学部に進学した²⁶。明治大学卒業後ただちに帰国したが、一緒に留学した留学生の中で最も遅い帰国であったため²⁷、第2次日韓協約から始まる植民地化の流れをすべて日本で経験してしまった。いいかえれば、故国韓国が侵奪される様子を、植民地化を進めている日本で見ていることになる²⁸。『日記』からは、その心の痛み、もどかしさが生々しく読み取れる。

『日記』から読み取れることは趙鏞殷の経験だけでなく、留学生全体のこと、日本の社会の様子、気候なども書かれている。それゆえ、『日記』は、単なる趙鏞殷の日本体験記という次元を越えて、1910年前後の日本の様子を記録したものとしても貴重なものであるといえよう。

テキストについて

前述したようにテキストには『全集』を用いた。『日記』は漢文が中心であるが、そこには、韓国でしか使われない漢字語や語尾表現、日本語の影響を受けたもの、

¹⁸ 1909年4月25日、「大韓興学報」3号。

¹⁹ 伊藤博文の暗殺については、事件1年後の1910年10月16日に殺害1年目に初めて触れて、思いを詩にしたためた。

²⁰ なぜか、一中のそばで起きた、日露戦争の講和条約反対運動である日比谷焼き討ち事件の記事も掲載されていない。この事件は戒厳令が布かれたほどの事件である。騒動中も一中は授業を行っていたので(『日比谷高校百年史(以下百周年)』上巻、日比谷高校百年史編集委員会編(1979)87頁)、趙鏞殷が事件に遭遇していないはずがない。不思議なことに、日記には事件が起きた日自体の記載がない。

²¹ 1910年4月18日

²² たとえば、1910年5月28日。

²³ 1910年8月19日、8月20日、8月21日。他にも数カ所ある。

²⁴ 1910年8月25日

²⁵ 1912年2月24日

²⁶ このとき、多くの留学生は明治大学専攻科法科にいた。趙鏞殷のように正科にいた留学生はごくわずかであった(『明治大学校友会名簿』大正14年版、明治大学(1925))。

²⁷ 帰国が遅れたのは、予科への進学がうまく行かなかったためである(1907年10月24日)

²⁸ 金基承前出「近代体験」46頁以下

清国語の影響を受けたものが含まれる。以下に例を示したい。

(1) 韓国でしか使われない漢語

「舍伯」

「推尋」²⁹

「点心」³⁰ 韓国語の「点心(점심)」で、中国語の「点心」ではない。

「於焉」³¹

「於焉間」³²→いつの間にか

「推来」³³→引き出してくる

「推覓」³⁴→引き出してくる

「八臺重侍下」³⁵

「層堂」³⁶

「始作」³⁷→시작であるが、日本語でも中国語でもない。

「晬宴」³⁸→誕生日の祝宴

「曾祖妣」³⁹

「姨従氏」⁴⁰など枚挙にいとま無い。

これらの単語は、国立国語研究院『標準国語大辞典』のような辞書にも収録されていないものが多く、結局、植民地時代に出版された『朝鮮熟語解釈 全』が有用であった⁴¹。また、語尾表現については趙鏞殷の癖かもしれないが、来日当初、強調表現の「耳」の使用が目立つ⁴²。韓国式の漢文の特徴だろうか。

(例) 本校大運動会也、觀光後來耳⁴³

是日、日本所謂神嘗祭也、休業耳⁴⁴

(2) 日本語由来のもの

a) 当時の社会で使われていたもの

「働工場」⁴⁵→かんこうば。現代のスーパーマーケットにあたる。

「安知善不臨」⁴⁶→アンチプリン(解熱剤)

²⁹ 1906年11月27日他多数

³⁰ 1905年7月25日

³¹ 1905年9月29日

³² 1906年1月27日、1906年7月31日

³³ 1906年1月16日、1908年11月16日

³⁴ 1905年12月22日、1908年9月17日

³⁵ 1906年1月1日、1907年1月5日他

³⁶ 1905年2月19日

³⁷ 1907年1月28日

³⁸ 1908年2月1日

³⁹ 1905年9月26日、1906年10月15日

⁴⁰ 1908年6月12日

⁴¹ 山之井麟治著『朝鮮熟語解釈 全』第4版、玉村書店1916(朝鮮大邱府)、1905年前後は、開化期で言葉の変動の大きい時期であるが、その頃まで使われた漢字語を紹介する辞書の登場が待たれる。

⁴² 1904年12月10日

⁴³ 1904年11月15日

⁴⁴ 1904年11月23日

⁴⁵ 1906年1月5日など

⁴⁶ 1911年6月10、1910年3月1日は英語で薬品名が書かれる。

「鍋鈍屋」⁴⁷→鍋焼きうどん(饅饨)屋か。「鈍」は「饨」の誤り。あるいは「饅饨(うどん)」の誤りの可能性もある。

これらは、当時の日本人にとっては普通の表現であるが、現在となつては理解も難しいし、辞書にも出ていない。

b) 日本漢語由来の固有名詞

「至烈道」⁴⁸→ジレット。『日記』では「京城青年会幹事」と書かれているが、「皇城基督教青年会総務」であった。『日記』の他の場所には「吉礼泰」という韓国名もでてくるが⁴⁹、それは用いられていない。至烈道(シレット)は韓国音なら지열도、中国音なら(Zhi Lie Dao)である。

「沃土丁幾」⁵⁰→ヨードチンキ。

「湯気」⁵¹→召のことであるが、韓国語にないためわざわざ趙鏞殷が(召)と補充している。日本独特の習慣の所に、同様な説明を加えているものがある⁵²。

「渡米」⁵³→アメリカ。韓国式の美国でなく、日本式の米国を用いている。

c) 日本語の音訳

「古里」⁵⁴→「こうり(発音=こおり：行李)」。韓国語で行李は旅具のことで、『日記』でもこの意味で用いられている。一方、日本の行李は通常、竹や柳で編んだ箱形の物入れのことで、旅行鞆や、衣類の保管箱として使われる。趙鏞殷は鞆屋で「古里」を購入しているが、韓国語の「行李」と日本語の「行李」を混同させないために、あえて「古里(고리)」を当てたのであろう。長母音を無視しているのは、韓国語に影響を受けているためと考えられる。

「抱雲図」⁵⁵→パウンド(ポンド(重さ))。なお、1906年7月20日は斗운드とハングルで書かれる。

「馬臥多菓」⁵⁶→「まわた菓」。産前産後の血の菓である「正産湯」の別名。

「久羅雲社」→グラウンド。「社」は「杜」の誤植であろう。これは日本語音、韓国音が同じため、どちらか分からない。

このように日本固有のものについて日本音、韓国音で書かれているものが混在していることもテキストの特徴である。

(3) 清国語の影響が強く表れるもの

「印度膏」⁵⁷→ゴム管。

「去監督部尋学費 20 円来」⁵⁸ 「去」→「行」 趙鏞殷は清国語(ほぼ現代中国文)を学んでいた。訳文中、註で「行く」でないと意味が通らないと指摘したところ、現代中国語では「去」は行くという意味だという指摘を受けた。

⁴⁷ 1911年1月13日

⁴⁸ 1906年6月29日

⁴⁹ 1910年10月22日

⁵⁰ 1905年7月

⁵¹ 1906年7月17日

⁵² ほかに、「下女」(1906年9月18日)、「夜市」・「下駄」(1906年10月9日)、「幾何」(1906年10月10日)、「天長節」(1906年11月3日)など。

⁵³ 1912年4月10日

⁵⁴ 1906年1月19日

⁵⁵ 1906年9月14日

⁵⁶ 1909年9月13日

⁵⁷ 1908年6月20日

⁵⁸ 1912年1月25日

趙鏞殷の文章に使われる単語は、後半になるほど日本語の影響を受けたと思われる語彙が増えている。趙鏞殷の書いた韓国文も同様で、1910年に「孝の観念の変遷について」⁵⁹を日本語から翻訳して以来、それまでの国漢文から現代韓国語に近い文体に変化している。他の留学生もそうであるが、趙鏞殷も日本で学ぶ中で日本語の影響を受けていた⁶⁰。一方で清国語(中国語)も学んでおり、その影響も受けていた。結局、漢文を基礎として、韓国の固有漢字語混じりで書かれていたものが、時間がたつにつれて日本式漢語、清国語の影響も受けたものになった。同じ漢字でも様々な出自をもつものが渾然一体となっていることが『日記』の特徴である。

その上、先述した「鍋鈍屋」、「久羅雲社」のように、漢字の誤りも多い。その多くが日本の固有名詞である。誤記は、本人が誤って書いたと思われるものだけでなく、原典から活字に移記するときに誤ったと思われるものも多い。さらにアナグラムと思われるものもある。以下に例示したい。

(1) 本人が誤って書いたと思われるもの

「日蓮寺」⁶¹→池上本門寺。日蓮宗の総本山

「王子鳥山」⁶²→王子飛鳥山

「犬吠岬」⁶³→犬吠埼

「우메노기」⁶⁴。日本の東北地方に修学旅行へ行ったときに買った仙台の名産品。「埋木(우메노기)」と書いてあるが、(우모레기)の誤記である。

「東海線」⁶⁵→東海道線

「麻布区兵衛町12番地」⁶⁶→麻布区市兵衛町12番地

「麹町区8丁目6番地」⁶⁷→麹町区麹町8丁目6番地

「第1福四万館」⁶⁸、「福万新館」⁶⁹→第一福島館

「青山農家大学」⁷⁰ 青山大学は青山師範学校(現：東京学芸大学)のことであるが、このとき趙鏞殷が訪ねた場所は農科大学(現：東京大学農学部)である。青山まで市電で行き、そこから徒歩で向かったため、名前を混同したか。

「法院寺」⁷¹→法持院

「国際平時公法」⁷²→平時国際公法

「飯田喬平」⁷³→飯島喬平

「万歳橋」⁷⁴→万世橋。日本語では「万歳橋(ばんざいばし)」、「万世橋(まんせいばし(発音：まんせえばし))」と別音だが、韓国語ではともに「만세교」。「万世」と聞いたものを、

⁵⁹ 「大韓興学报」第9号(1910)、訳は武井 前掲『東京留学』267頁以下

⁶⁰ 崔南善のケースについては、白南徳「20世紀初頭における在日韓国人留学生の日本語の受容--文学者崔南善の場合」広島大学大学院教育学研究科紀要、第二部、文化教育開発関連領域(54)(2005)221 以下参照

⁶¹ 1905年2月11日

⁶² 1906年4月15日

⁶³ 1906年7月25日

⁶⁴ 1905年10月20日

⁶⁵ 1906年7月19日

⁶⁶ 1907年1月1日

⁶⁷ 1907年4月30日

⁶⁸ 1905年12月23日

⁶⁹ 1908年3月21日

⁷⁰ 1908年11月8日

⁷¹ 1908年8月3日

⁷² 1910年1月24日

⁷³ 1911年6月15日

⁷⁴ 1912年4月2日

「万歳」と取り違えたのだろう。ここでも「まんせえ」の長母音は無視されている。

(2) 転載するときに誤って移記したと思われるもの

a. 地名の間違い

「大東」⁷⁵→大原(おおはら)。「大原」であることは、一中側の記録や⁷⁶、「勝浦まで徒歩で30里ほど行く」とした『日記』の記事から確認出来る⁷⁷。実際にその数駅前に「大東(だいとう)駅」が実在するため、それと混同した可能性もあるが、利用した3回とも同じ間違えをすることも思えない。草書で「東」、「原」は字形が似ているため、誤ったのだろう。

「両浦」⁷⁸→内浦

「太陽駅」⁷⁹→大場駅

「愛宕山」⁸⁰→愛宕山

「百梅園」⁸¹→白梅園

「報生院」⁸²→根生院

b. 人名の間違い

「山谷由一郎」⁸³→岩田一郎。山、石を分離し、田を「由」と間違えた。

「春木衆司」⁸⁴→青山衆司

c. そのほか

「披瀋安報喜何如」⁸⁵→「瀋」は「審」の誤り。『文集』の漢詩の章では「審」である⁸⁶。

「邵隆」⁸⁷→邵隆 高齢のこと。前者では意味をなさない。

「而本国穿(「于」でなく「干」)有此等詳史」⁸⁸「穿」→「罕」。前者は日本で最大の漢和辞典、諸橋「大漢和辞典」でも意味不詳と書ある⁸⁹。

(3) アナグラムと思われるもの

「吉原」、「吉元」⁹⁰、「吉村」⁹¹→吉原のこと。東京の有名な歓楽街であるが、「原」、「元」が日本音、韓国音とも同じ音(겐, 원)であることから単なる漢字の取り違えの可能性もある。一方で吉村は日本語も韓国語も音が合わない。

「폐원탄」⁹²→幣原坦(しではら・たいら)の韓国漢字音。

「씨텍치부」⁹³→刑事(detective)。日本側にすぐには読み取れないように配慮したか。

⁷⁵ 1904年12月26日、1905年1月7日、1905年7月30日、31日

⁷⁶ 「学友会」45号

⁷⁷ 前掲1904年12月26日

⁷⁸ 1905年8月7日

⁷⁹ 1906年7月18日

⁸⁰ 1906年9月25日

⁸¹ 1909年4月1日

⁸² 1910年1月24日

⁸³ 1911年6月17日

⁸⁴ 1911年6月19日

⁸⁵ 1906年9月18日

⁸⁶ 前掲『文集(下)』177頁

⁸⁷ 1911年1月22日

⁸⁸ 1912年4月29日

⁸⁹ 諸橋轍次『大漢和辞典』巻8 大修館(1958)65頁

⁹⁰ 1906年3月7日

⁹¹ 1907年5月6日

⁹² 1906年1月8日

⁹³ 1912年2月22日

(1)については本人が間違えた可能性が大きい、(2)は「岩」を「山谷」としたように、漢字の間違いがひどく、本人の書き間違えとは思えない。

今回の翻訳では主に、日本の固有名詞についての誤りを指摘したが、韓国の固有名詞やそのほかの部分にも同様の誤りがあるかもしれない。漢文の場合、文字の間違えによって、思わぬ意味の取り違いや判読不能に陥る可能性が大きい。

また、漢字の誤りだけではなく、句読点がおかしいところもある。

「付葉于京城利川及朴友容喜。金友基炯付書于竹山郡」⁹⁴→「朴友容喜金友基炯。付書」

文字以外にも、原典に書かれていた「人格試験管」、「毛筆で描かれた地球・月・火星などの軌道と彗星軌道の図解」、「銀河を遠景とした彗星の夜景図」、「旗竿の図」、巻末の文章など、『全集』では収録されていないものも多い⁹⁵。このような点からも原典を「再検討」して、テキストを校訂する必要は大きい。日記を後になって修正した可能性もあるからである。先ほどの「山谷由一郎」の場合、原典に「山谷」と書かれていたとすれば、後から『日記』を書き直した可能性が高くなる。原典を再検討することは、『日記』の性格を明らかにするためにも重要である。

趙鏞殷の学校体験

(1) 東京府立第一中学校

趙鏞殷は1904年まず一中に留学した。当時の中学校は満12歳から17歳までが在学する5年制であった。一中を留学先としたのは本人の意思ではなく、日本側の指定であった⁹⁶。ここで、2年半寄宿舎に暮らしながら、日本語と基礎学力をつける予定であった⁹⁷。

しかし、趙鏞殷はじめ留学生にとって一中での生活は不満の多いものであった。学校や寄宿舎の規則が大変厳しく、生活態度だけでなく、あらゆることが時間に縛られていたからである⁹⁸。規則が厳しかったのは、日本人学生に対しても同様であったのだが⁹⁹、それは、当時日本でヘルバルト流の厳格な教育が行われていたためであった¹⁰⁰。だが、多くが20歳を越えていて、趙鏞殷のように妻帯者も多かった留学生を、中学生と同じに扱ってよかったかは疑問である¹⁰¹。

教育内容に対する不満もあった。基礎教育が、実学教育に照準を合わせて行われ

⁹⁴ 1911年5月30日

⁹⁵ 人格試験管(1910年4月21日)、毛筆で描かれた地球・月・火星などの軌道と彗星軌道の図解・銀河を遠景とした彗星の夜景図(1910年5月25日)、旗竿の図(1910年11月24日)。なお『全集』には『日記』巻末に掲載された文章が一部転載されている。「夫人論」(236頁)、「耶蘇의 一貫主義」(238頁)、「賀培材学報創刊」(239頁)がそれであるが、いずれも第3巻の巻末に書かれていたとする。

⁹⁶ 一中に決定されるまでの動きは、武井、前掲『皇室特派留学生』11頁以下。

⁹⁷ 1904年11月2日

⁹⁸ 1904年11月4日。たとえば、午前5時起床、6時食事、7時登校、午後寄宿舎へ戻る。起床、就寝のときに点呼、日曜以外は外出禁止など。

⁹⁹ 前掲「日比谷高百周年史」

¹⁰⁰ 武井『前掲』34頁以下。なお、ヘルバルト学派の韓国への導入、影響については、김성학『서교교육학 도입의 기원과 전개』文芸社(1996)56頁以下参照。

¹⁰¹ 大量に酒を飲んで処分された者ものいた(武井『前掲』38頁)、なお、留学生は16歳から25歳を対象に募集されたが(『日記』序文)、実際は30代まで参加していた。

たからである¹⁰²。当時の日本では、国力の増強にともなって、実学教育の重要性が認識されていた。実学こそが日本の国力増強に貢献するという認識で、そのための教育制度も整備されたところであった¹⁰³。勝浦軼雄(かつうら・ともお)一中校長も、新しい韓国を作るためにはまず急いで国力を増強する必要がある、それには実学が必要であると認識していたのだろう¹⁰⁴。

一中では実学のための教育が行われ、校外学習として多くの場所を訪ねた。1904年から1906年の間、『日記』の外出記事の多くがそのようなときに出かけた場所で、その多くが日本の近代化に関連したところであった¹⁰⁵。それらを見学した趙鏞殷は、日本の近代化に感心するだけでなく、社会問題なども感じていたようだ。

もともと、趙鏞殷は、留学以前から民族的運動に対して敏感であった。ベルリン駐在の兄、趙鏞夏から世界情勢についての情報も得ていた¹⁰⁶。そこから近代教育を受けて、近代文化を韓国に導入しなければ、韓国は植民地になってしまうと考えた¹⁰⁷。それゆえ日本での植民地化へ向けた雰囲気来日当初から強く感じていた¹⁰⁸。

このような趙鏞殷だから、日本に来たときには、すでに日本国内の社会問題に目が向いていたといえる。1906年の東海地方夏期旅行において、趙鏞殷は日本の神社、学校、緑、耕地、電信、交通、工場の発展を、近代化の原因の一つとして褒め称えるとともに、それに続けて小さな文字で「孤児、やもめが目についた。日露戦争の余毒が及んだのではなかろうか」と記した¹⁰⁹。これは日露戦争で起きた日本の社会問題に鋭く注目していた証拠であろう。ここから、一中の思惑とは異なり、趙鏞殷は日本の近代化に関心をもちつつ、社会的矛盾をも意識していたことが分かる。

同じ年には、「日本の東京は〔自然が無くて〕物〔の変化〕によって季節を知ることが出来ない」と都市化の問題点を指摘している¹¹⁰。このように、来日して間もない時期から社会問題に関心を持っていたことは注目される。趙鏞殷は様々な講演会にも参加しているが、その多くが政治問題、社会問題に関するものであった¹¹¹。

このような趙鏞殷の視点とは異なり、勝浦側は、韓国の国作りのためとして実学教育を目標とした。だが、留学生の多くが望んだ勉強は実学とは異なっていた。彼らが国作りに必要と考えていたのは法律の勉強であった。趙鏞殷が、1906年1月、一中同盟休校中に明治大学法学部に入学したことはこの現れである¹¹²。実学に対す

¹⁰² 「学友会」46号、『百周年』上、89頁

¹⁰³ 武井『前掲』24頁以下参照

¹⁰⁴ このころ、外務省では韓国保護国化へ向けた国際法的検討が始まっていたが、植民地化は選択肢の一つでしかなかった。具体的な過程については、海野『前掲』152頁以下、347頁以下。

¹⁰⁵ 「日本体育会」(1904.11.12)、淀橋浄水場(1904.12.10)、房総半島(1904.12.26-1905.1.7、1905.7.24-8.23)、農商工省(1905.5.19)、中央气象台(1905.7.19)、仙台修学旅行(1905.10.19-10.22)、観艦式(1905.10.23〔一中生徒全員参加〕、明治天皇行幸(1905.11.14 一中全員参加)、横須賀軍港(1906.6.2〔全校遠足〕)、夏期修学旅行(東海地方 (1906.7.16-7.31)など。

¹⁰⁶ 以上、『年譜』(『全集』下、所収)より

¹⁰⁷ 「回顧」、武井前掲『東京留学』365頁以下

¹⁰⁸ たとえば、1905年10月19日では日露講和条約締結で「3千里の江山、5百年の社稷は危うい千斤の卵のようなものだ」と韓国の運命を慨嘆している。

¹⁰⁹ 1906年7月19日

¹¹⁰ 1906年10月8日

¹¹¹ たとえば、「増税反対演説会」(1908年1月20日)「電車私有問題東京市民大会」(1911年7月7日)、「市民政談演説会」(1911年7月8日)など。趙鏞殷が聴いた講演の題目については『都新聞(みやこしんぶん)』などの広告から、かなり明らかにすることが出来た。趙鏞殷が参加した講演会と影響については、金基承『夢見た世界』66頁以下に詳しい。

¹¹² 1906年1月9日、崔麟『自叙伝』

る意識が日本と韓国では大きく異なっていたため、日本流の考え方で実学教育を行っても、その意味を留学生が理解することは難しかったであろう。勝浦もなぜ留学生が反発しているかは想像できなかった。一中、留学生双方とも相手の考えが理解できなかったといえるのだが、ついに、留学生の不満が爆発して、同盟休校¹¹³、一中退学へと進んだ¹¹⁴。そのきっかけは、勝浦が「報知新聞」に語った記事であった¹¹⁵。

勝浦は日本語以外の実力はまったく「カラ駄目」だと言った。留学生にとって、文法が似通っていて、共通の漢字を使った日本語は学びやすかったであろう¹¹⁶。一方で、数学や理系、芸術については「カラ駄目」だったのは、日本に来るまでに、これらの教育を受けておらず、知識の基盤が出来ていなかったからである¹¹⁷。

同盟休校で退学した趙鏞殷は、帰国させられる可能性もあったものの¹¹⁸、府立一中に復学し、1907年3月に卒業した。復学後は下宿生活となった¹¹⁹。すでに留学生用の寄宿舎は一中の学生の寄宿舎に転用されていたからである¹²⁰。授業は淡々と進んだようだが、試験問題以外、授業についての記述はない。学校生活は面白くなかったのであろう。

だが、金基承も指摘しているように、従来の儒教型教育を受けた彼らが、日本で近代教育を受けた影響は大きかった。「近代的に分割された時間に基づいて作られた制度の中に入」ったということだからだ¹²¹。

(2) 明治大学

一中卒業後の趙鏞殷の進学計画は、第一高等学校を経て東京帝国大学へ行くことであった¹²²。そのためか、第一高等学校のあった本郷区方面に下宿を探しに行ったこともあった¹²³。だが、同期の卒業生が第五高等学校などに進学したのに対して¹²⁴、なぜか趙鏞殷は進学できなかった。趙鏞殷はその理由を「日本政府のため」としているが¹²⁵、具体的なことは書かれていない。

結局趙鏞殷は、他の留学生より一年遅れて、明治高等予備校¹²⁶、明治大学(めいじだいがく)¹²⁷、正科(以下『明大(めいだい)』)と進学した¹²⁸。明大は韓国人留学生が多

¹¹³ 1905年12月4日

¹¹⁴ 1905年12月21日に、退学が認められたことを趙民熙公使から正式に伝えられた。

¹¹⁵ 『韓国留学生(勝浦府立第一中学校長談話)』報知新聞1905年12月2日、12月3日。

¹¹⁶ 1904年12月14日、1905年4月29日に一中で「日語会」が開かれたが、日本語力ののびはかなりのものだったようだ(「学友会」46)。また、1905年夏の房総修学旅行のときに書いた関正基の作文を載せているが、韓国語の影響が見られるものの、かなり程度書く力が付いていたことが分かる(「学友会」46)。

¹¹⁷ 金基承 前掲「近代体験」

¹¹⁸ 1906年1月31日、幣原坦学部参事官から官費を受ける資格は喪失したと直接宣言され、2月2日に韓致愈留学生監督から、復学しなければ帰国するしかないと言われていた。

¹¹⁹ これ以降の下宿の変遷については「趙鏞殷の下宿の変遷」、武井前掲『東京留学』385頁以下

¹²⁰ 東京都立教育研究所『東京教育史資料大系』8(1974)

¹²¹ 金基承 前掲「近代体験」40頁以下

¹²² 「年譜」(『全集』)

¹²³ 1907年7月30日

¹²⁴ 1907年10月7日、10月16日、10月24日

¹²⁵ 1908年10月6日

¹²⁶ 1908年3月2日

¹²⁷ 1908年10月6日

¹²⁸ 1909年9月13日

く在籍していて、その大部分が法学部にいた¹²⁹。

明大は金基承も指摘するように自由な雰囲気を持っていたようだ¹³⁰。しかし、趙鏞殷自身は大学に必ずしも熱心に通っていたとは言えず、欠席も多い。持病の痔に苦しんだことも多かったようだが、ただ欠席したとしか書いていないところも多い。

法律の勉強も試験直前に大急ぎで行ったようで¹³¹、法律関係の本も試験直前に集中的に購読している¹³²。そのため初年度の結果は26位中25位という惨憺たる結果であった¹³³。さすがに翌年は一生懸命勉強したようで、留学生の中で3位となり、表彰された¹³⁴。

明大は、趙鏞殷の在学中に学長だった岸本辰雄(きしもと・たつお)などフランス法学派の人が作った学校であった。だが、趙鏞殷の学んだ1910年前後は、日本の法律学界全体が、ドイツ法律学の圧倒的に優位な状況となっていた。ドイツ法律学派が優位になった理由は、1889年に制定された大日本帝国憲法がプロイセン憲法を参考にしたことが決定的であった。1907年に制定された刑法も、ドイツ刑法学の影響を強く受けていた。その結果、刑法学会はあたかもドイツ刑法の議論をしているのではないと言われる状態になってしまった¹³⁵。

趙鏞殷の刑法の担当者は牧野英一(まきの・えいいち)であった¹³⁶。牧野は、ドイツの刑法学者リスト(Franz von Liszt)の元に学び、リストの犯罪論をより深化、徹底させて日本の刑法学会をリードしていた。また、行政法を担当した上杉慎吉(うえすぎ・しんきち)も、ドイツ法律学をもとに国粹的観点を加えた学者であった¹³⁷。このようにドイツ法の影響を強く受けた講師陣から講義を受けていたのである。

しかし、趙鏞殷自身が、一中の同盟休校中から法律学を志したにもかかわらず、大学では法律学にあまり関心が向かなかったようである。欠席が多かったのもその現れであろう。『日記』には法律を学んだ人がよく使う「主観」、「客観」、「主体」、「客体」のような用語が現れず¹³⁸、刑法を学んだなら当然に答えられる基本的な問題に対しても答えられていない¹³⁹。

関心が向かなかった理由はいくつか考えられ、その一つに、趙鏞殷が慣れ親しんできた韓国伝統の法と、西欧由来の法律学との違いがあまりにも大きすぎたことが考えられる。西欧式の法律学は極度に論理的でテクニカルな思考が要求されるが、この思考方法になじめなかったのかもしれない。大学在学中に発表された文章も、論理的思考の影響は弱いように見えるからである¹⁴⁰。当時の大学では、教科書はな

¹²⁹ 明治大学『明治大学校友会名簿』大正14年版(1910)

¹³⁰ 金基承『夢見た世界』61頁以下

¹³¹ 1910年3月10日では講義録を1日108頁ずつ読むと決心したが、同5月25日には「まだどの科目も試験の準備をしていない、どうしよう」と嘆いている。

¹³² 武井 前掲『東京留学』335頁以下

¹³³ 1910年7月10日

¹³⁴ 1911年7月10日、7月12日、明治大学『学叢』17号

¹³⁵ 井田良「ドイツ刑法の現状と比較刑法研究の今日的意義」(『Jurist』No1348(2008)有斐閣)参照
¹³⁶ 前掲『学叢』7号

¹³⁷ 1911年6月20日

¹³⁸ 同旨：金基承『夢見た世界』46頁

¹³⁹ 1910年10月23日。明治大学「法律討論会」で、正当防衛の「急迫性」が問題となっていたが、これに対してなぜ「急迫性」がないかについて、講師から聞いたこととして記している。

¹⁴⁰ むしろ、同じ明治大学で法学を学んだ他の留学生のほうが大きかったであろう。趙鏞殷の日記に現れる留学生の多くが法曹関係に就職していた。1910年以降の植民地朝鮮の法体系は日本本土と同じく、ドイツ法の影響を強く受けた日本流の法体系であった。また、法律の中には韓国の伝統法を用いたり¹⁴⁰、明律を元に作られた「刑法大全」の条文が一部残されていた。そのた

く、口述筆記中心で講義が行われたが、このような高度に論理化された内容を、十分に聞き取って、書き取ることができたかどうかも疑問である。

以上のことから、趙鏞殷の思想形成に、法律学はそれほど大きく影響しなかったように思われる。むしろ、金基承も指摘するように、この時期に読んだ数多くの哲学書や宗教体験からの影響の方が大きいようだ¹⁴¹。だが、体系的思考を極度に重んじる法律学に触れた趙鏞殷は、それでも何がしかの影響は受けたはずである。したがって、法律学が、趙鏞殷にどのように影響を与えたかは、改めて検討される必要がある。

宇宙観(大正生命主義の影響)

趙鏞殷の文章は1910年前後から思想的傾向が強くなる。金基承は1910年前後から宗教と哲学に集中的な関心をもったことは、彼の哲学的思索が「日本の宗教哲学界の風土の中で行われたことを意味する」と指摘する¹⁴²。

金基承によれば、当時の日本ではドイツの観念哲学を方法論として受容する傾向があった。井上哲治郎(いのうえ・てつじろう)以来、日本の哲学界では、東洋と西洋の哲学の統合が課題となっていた。黒岩涙香(くろいわ・るいこう)は『天人論』で、「特定の宗派的立場を排除して、儒教、仏教、キリスト教の統一性を強調し、すべての個人が宗教の教祖になれる」として東西の哲学を統合した。黒岩をはじめとして、趙鏞殷が接した哲学や宗教書の大部分は、東洋と西洋の聖人や哲人を同列にして議論を展開したものであった。このような背景が趙鏞殷の宗教観形成に一定の影響を与えたとも考えられる。

さらに1910年以降キリスト教に入信し¹⁴³、洗礼まで受けた¹⁴⁴。教会に通うようになったきっかけは、必ずしも信仰心からだったわけではないようだ。むしろ、留学生同士が安心して集まれる場所を求めたということが大きな理由であった。

趙鏞殷ら留学生が、韓国併合前に民族運動の拠点としていた「大韓興学会」は留学生監督部に事務所をおいていて、留学生は頻繁に集まっていた¹⁴⁵。しかし、留学

め日本の法学も韓国の状況も知っている留学生は総督府にとって貴重だったはずだ。ところで、留学生の多くが日本で民族運動を行っていた。その経験が実際の裁判でも生かされた可能性がある。裁判はあくまでも存在する法律を解釈して適用する仕事であるが、判決理由の中に民族的精神をたくみに混ぜ込んでいた可能性がある。彼らの判決理由などを読み、その要素を抽出する必要があるように思われる。

¹⁴¹ 金基洙 前掲『夢見た世界』82頁以下

¹⁴² 金基承 前掲『夢見た世界』86頁。以下は金基承『夢見た世界』86頁以下による

¹⁴³ 1910年11月4日

¹⁴⁴ 1911年10月22日

¹⁴⁵ 留学生を監督していた韓国公使が第2次日韓協約で帰国するため、留学生監督を元韓国公使館に駐在させ、学部の留学生監督部(以下監督部)とした。『日記』には、従来よくわからなかった監督部の様子が描かれている。

監督部の中には、留学生団体の「大韓興学会」の事務所も置かれ、自前の印刷所を持っていた。この印刷所で『大韓興学報』が印刷、発行された。留学生の会合も監督部で頻繁に開かれ、日本側からは「排日的」と見られる民族的活動を多く行っていた¹⁴⁵。『大韓興学報』が日本側の手によって発行禁止になってからも、「大韓興学会」は韓国併合まで監督部を舞台に民族的活動を継続し、「排日」ピラや秘密文書を印刷していた。

留学生監督は「学部所管日本留学生規程」によって留学生を監視する立場であったが、全体として留学生監督は留学生の民族運動に好意的であった。

このように留学生や、留学生監督が留学生監督部で「排日的活動」ができたのは、公使館が

生監督部は併合後総督府の機関となり、簡単に集まることが出来なくなった。青年教会は、それまでの留学生監督部に代るそのための唯一の場所となった¹⁴⁶。趙鏞殷が洗礼まで受けるに至ったことは、そのような事情も大きかったであろう。それだから、キリスト教入信後も仏教などを排除せず、同一視しようとしていたのだと思われる。

一方、当時社会では宇宙論が流行していた¹⁴⁷。趙鏞殷も、宇宙論について「有神説一元論」を採り¹⁴⁸、宇宙から自然、人生までが「大霊」というべき統一精神による「一連のつながりのあるもの」と考えた¹⁴⁹。その上帝が趙鏞殷に「穏やかに、自分に窮乏を救うことを命じた」。すなわち、韓国を救うように命令したという¹⁵⁰。宇宙の「上帝」から命ぜられた趙鏞殷は、さらに黒岩の思想の影響と融合して¹⁵¹、イエス、孔子、孟子、ソクラテス、仏陀を同格と考え、自分もそれに連なるものとして解するようになった¹⁵²。

趙鏞殷の思想は、自分がイエス、孔子、孟子、ソクラテス、仏陀と同格と考えるという点では求道的であると同時に、韓国を救うように命ぜられ、そのために活動を行う点では外部の変革にも目が向いていたものと言える。日本留学当初から持っていた社会問題への関心が、「上帝」の命令と結びついたのであろう。

当時の日本は、「大正(たいしょう)生命主義」とよばれる思想の一大潮流の芽が出てきた時期であった。大正生命主義とは大正期(1912-1926年)の「生命主義」のことで、生命をスーパーコンセプトにする思想であるが¹⁵³、趙鏞殷の思想はこの思想界の影響を強く受けていたようである。

日本でも1880年代後半以降、進化論的「生命一元論」を展開したヘッケル(Ernst Haeckel)の思想が知られるようになっていた。また、1890年代初頭には、エマソン(Ralph Waldo Emerson)の思想を背景として¹⁵⁴、個が普遍性を獲得する理由は宇宙に

撤収した後も学生監督、監督部が、依然として「不可侵(≡治外法権)」であったからだと思われる。このことについては、近い将来別の論文で明らかにしたいと考えている。

ところで、『日記』では監督部のことを「監督庁」、「監督所」、「監督部」、「元公館」のように様々な名称で著している。『日記』翻訳中ではどれが正しいか分からなかったものであるが、このたび、東京府と留学生監督の間で交わした「契約書」が発見され、そこに「留学生監督部」と記されていることが分かった¹⁴⁵。この契約書についても、近い将来資料として公表したいと考えている。

¹⁴⁶ 1910年12月25日、青年学院でクリスマスパーティーが開かれたが、趙鏞殷は「興学会の解散以来、みんなが集まる機会が漠としてなかった。今日になってようやくこういう会が開かれたのだ。他の人も同じ気持ちだろう」と書いている。ただし、同じ文章で、日本人巡査が監視していることも嘆いている。

¹⁴⁷ 宇宙論については、ヘッケル『宇宙の謎』、内山賢次訳、春秋社(1929)参照。その影響について、鈴木貞美『「大正生命主義」とは何か』(鈴木貞美編『大正生命主義と現代』河出書房新社(1995))3頁以下。

¹⁴⁸ 1910年5月20日

¹⁴⁹ 1910年11月29日。なお、趙鏞殷が黒岩『天人論』を読み終えたのは、この直前の11月3日であった。

¹⁵⁰ 1911年5月「東遊略抄巻5少序」、1912年5月12日、なお、趙鏞殷は上帝、大霊をほぼ同じ意味で使っているように見える。

¹⁵¹ 金基承『夢見た世界』80頁以下

¹⁵² 1912年3月20日

¹⁵³ 以下は鈴木、前掲『「大正生命主義」とは何か』2頁以下による。

¹⁵⁴ 鈴木前掲註157 72頁以下

あふれるスピリッツ、霊や気との交信によるという考えが現れていた¹⁵⁵。三宅雪嶺(みやけ・せつれい)も、1909年に『宇宙』という著書で、生命による個体や種の連続性を強調する「宇宙有機体論」を発表していた¹⁵⁶。

したがって、趙鏞殷が日本にいた時代は、「東洋的生命観が受け皿となり、キリスト教スピリチュアリズム系の思想が受容され、そこにショウペンハウエル(Arthur Schopenhauer)、ニーチェ(Friedrich Wilhelm Nietzsche)、トルストイ(Tolstoy)らの生命思想が加わって」、その一方で「ヘッケルの生氣論的生命一元論やドイツ観念論心理学など」も受容された時代であった¹⁵⁷。趙鏞殷も大正生命主義に関連する講演を聴き、著書を読んでいた¹⁵⁸。

趙鏞殷の宇宙論、宗教論もまさにこの背景の中で生み出されたものである。1911年3月には、多くの哲学者の言葉を毎日『日記』に書いていて¹⁵⁹、それを自己の思想に繋げている¹⁶⁰。「宇宙と人生」という題で、討論会で演説もしたこともあった¹⁶¹。

鈴木によれば、このような「生命主義」は「宇宙の生命」に繋がるため、神秘的観念の色彩を帯びることがあるという。すなわち、生命主義はあるがままの「自我」に対して、本来的な「自我」のあり方を追究することになるために、内向すれば求道的になるし、外部の変革に向けば社会改造の運動に加わることもなる¹⁶²。趙鏞殷も神秘的な方向に思考を深めるとともに、その一方として社会改造に関心を持っていった。これが、趙鏞殷の帰国後の「三均主義」思想と、中国での独立運動に連なっていくと考えられる。

趙鏞殷はもともと思想に関心のある人だったようだが、このように思想面に意識が向いたことは、何よりも韓国併合の影響が大きかったのだろう。民族の独立が現実的ではなくなり、そのエネルギーを思想面に向けざるを得なかったからである¹⁶³。趙鏞殷は韓国併合直前に『大韓興学报』に発表した「甲申以後の列国の大勢の変動を論ずる」の中で次のように言った¹⁶⁴。

韓国という「物質的国家」でなく、「精神的国家」が望むことである。「精神は将来に活路が自在にあるので、これを心に命じて得るように心得て、後日活動する機会を待つべきである」。韓国の思想界に対する最近の影響は「後日の韓国民の理想的活動に応ずる武器」である。「同胞諸公よ。まめに武器を準備すべし。皇天が汝に機会を与えるゆえ、休まずに努力すべし…武器を準備する日が、即ち韓帝国の機会を得る日だ」。

すでに精神活動に活動を求めているとともに、それは「武器を取る」ためのことであることがわかる。「三均主義」はそのような思想の到達点といえるであろう。

¹⁵⁵ 鈴木貞美『大正生命主義、その前提、前史・前夜』(鈴木貞美編『前掲』71頁)

¹⁵⁶ 三宅雪嶺『宇宙』政教社(1909)

¹⁵⁷ 鈴木『前掲』76頁

¹⁵⁸ 1910年11月20日「精神修養団」の講演会 三宅雪嶺、島村抱月、加藤咄堂、1911年10月26日 黒岩周六、三宅雪嶺。著書については武井『東京留学』337頁参照。

¹⁵⁹ 1911年3月1日から3月20日

¹⁶⁰ 金基承『夢みた世界』93頁

¹⁶¹ 1910年5月8日

¹⁶² 鈴木『前掲』10頁

¹⁶³ 趙鏞殷「甲申以後の列国の大勢の変動を論ずる」『大韓興学报』第10号(1910)参照。訳文は武井『東京留学』271頁以下

¹⁶⁴ 「大韓興学报」第10号(1910年2月)

まとめ

ここまで、趙鏞殷の「東遊略抄」の日本語翻訳によって分かったことを紹介した。

趙鏞殷は留学した日本で様々な影響を受けた。言語面での影響、思想面での影響も大きい。これらの影響は、中国へ渡った後の民族運動の理論的分野にも大きく影響されたとと思われる。

趙鏞殷は大学進学がうまくいかず、同じ時期に留学した人より帰国が遅れ、1912年まで日本に滞在した。その間、第2次日韓協約、ハーグ事件、第3次日韓協約、韓国併合など、日本の韓国に対する圧迫を肌身で感じていた。当然、『日記』では日本に対する強い反発が書かれているが、日本政府に対する反発と日本、日本人に対する見方を分ける必要があるように思う。日本の近代化に対する評価や、日露戦争に対する評価が肯定的であったりしたが、ここでは扱うことが出来なかった。

『日記』は韓国語、日本語、清国語の要素が混在した「漢文」からなっているが、誤植と思われるものの検討から、テキストの校訂が必要であることを指摘した。次いで、学校時代の制度的背景を元にしながら、趙鏞殷が学校から受けた影響を検討した。この中で早くから社会問題に関心を持っていたことを指摘した。日本で近代社会の影響を受けた趙鏞殷も、専攻とした法律学そのものの影響は少ないと結論づけた。むしろ、趙鏞殷の思想的影響は法律学よりも当時の日本の思想的雰囲気の方が大きかった。早くから社会問題に関心を持ち、民族自立について意識していた趙鏞殷としては当然と言えるであろう。

『東遊略抄』の翻訳はいまだ作業途中であるため、内容面までの十分な分析が届かず、本論では各事項についての問題点を指摘することまでしか出来なかった。今後、より詳細に内容について分析していきたい。